深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　この小説の構成を四つの場面に分け、それぞれの場面での「下人」の心理の移り変わりを整理してみよう。

【答】

①　羅生門の下で雨やみを待っている場面

1　失職と雨で行き所がない。
〈途方に暮れる〉

2　手段を考える。
〈飢え死にを避けるために手段を選ばないとすれば、盗人になるよりほかにしかたがないと考える〉

3　決断をためらう。
〈結論を積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいる〉

4　大儀そうに立つ。
〈ともかくも、夜を明かそうと、思考を先延ばしする〉

5　はしごを目にする。
〈上なら、どうせ、死人ばかりであると、高をくくる〉

②　人の気配に気づき「楼の内」をうかがっている場面

1　誰かが火がとぼしていることに気づく。
〈恐る恐る楼の内をのぞく〉

2　老婆を目撃する。
〈「ある強い感情」（「六分の恐怖と四分の好奇心」）が起こる〉

3　老婆の行為を見つめる。
〈恐怖が少しずつ消えていく〉
同時に、
〈「老婆に対する激しい憎悪」「あらゆる悪への反感」が一分ごとに強さを増して燃え上がる〉
〈許すべからざる悪と判断する〉
〈盗人になる気でいたことなどは忘れる〉

③　老婆を捕らえて老婆の行為について尋ねる場面

1　老婆をねじ倒す。
〈老婆の生死を握っていることを意識する〉
〈憎悪の心が冷める〉
〈「安らかな得意と満足」の気持ちが生まれる〉

2　老婆にその行為について問う。
〈老婆の答えが平凡なのに「失望」する〉
〈失望と同時に、老婆に「憎悪と侮蔑」を感じる〉

④　老婆に対して引剝ぎを実行する場面

1　老婆の話を冷然として聞く。
〈ある勇気（盗人になる勇気）が生まれ、迷いが消える〉
〈飢え死になどは、意識の外に追い出される〉

2　老婆にその論理を確認する。
〈老婆を嘲り、老婆の論理を逆手にとって着物を奪う〉

▼ポイント▲　「場面分け」を中心とした段落構成は「構成」1に従う。心理の移り変わりは「構成」2の表組を元にしている。本文を指示できるように、引用を主としながら、下人の行動の流れに沿って心理の変化を整理した。

2　老婆の話から、老婆の、自己の行為についての弁明の要点を二点にまとめてみよう。

【答】

1　老婆が髪を抜いている女は生前蛇の肉を干し魚と偽って売っていた。悪いことをした者は悪いことをされてもいいのだという論理。〈悪には悪で報いてよい〉という〈応報の論理〉である。

2　老婆が悪いことをしたのは、しなければ飢え死にをするのだからしかたがなくしたことである。しかたがなくした悪を悪とすることはできない、それは大目に見るべきものだという論理。〈生きるために「しかたがなく」する場合、悪は悪と言えず、許される〉という〈生存の論理〉である。

▼ポイント▲　先ず語られるのは〈応報の論理〉である。これは相手に応分の非があることを強調することで、悪をする側の後ろめたさを薄める効果を持つ。責任転嫁の論理である。次の〈生存の論理〉は、「しかたがない」という言い方で、強いられた状況の必然に一切を委ねる責任解除の論理である。また「許される」という点では、全的情状酌量の論理であるが、御都合主義的な〈お互いさまの論理〉が含まれている。生存の限界状況に関する悪の問題については、古来「カルデアネスの板」（一人しか板にすがって生存できないとき、相手を溺れさせてよいか）として知られる問いがある。法的には「緊急避難」に当たるものだが、これは文字どおり「緊急」の事態の回避の際に専ら適用される法理である。老婆の日常的な生存の状況が緊急に当たるのかは考えなければならない問題である。老婆の論理を口実にする下人が限界状況にあるのかについては、多分に疑問がある。限界状況という言葉を下人を含めて主題的に「羅生門」に用いることには慎重でなくてはならない。

3　髪を抜かれている女と老婆の行為には、どのような共通点と相違点があるか、考えてみよう。

【答】　自分がお金を得て生計を立てるために行ったという点では共通しているが、老婆の行為は、生前に悪事を働いた死者を利用することは許されるという論理を付け加えていく点と、動物の肉ではなく人間の死体の一部を利用している点が異なっている。

▼ポイント▲　女は確かに太刀帯を騙してはいるが味もよいということで露見しても大きな実害があるわけではなく、いわば言葉巧みに偽物を高く売りつけることに成功してきた。老婆もまた、もし女の死体から取った髪の毛による鬘が完成して売る時は、同様に言葉巧みに偽りの由来を語って高く売りつけるかもしれず、共に商品経済の中で身を立てようとしている点は同様かもしれない。しかし本人（や遺族）に無断で人間の死体を利用する点は、下人にとっては、禁忌に触れているかのように感じている可能性も考えられる。口を閉ざした死体として登場した女は、老婆による物語を通して、下人にとってはたくましく生き抜こうとしていた存在として捉えられるのではないだろうか。一方、あわただしく悪の連鎖の中での許しを主張する老婆が、女性美や生命の象徴であるかのような女性の黒髪を抜く行為に、若い下人は、無意識のうちに嫌悪感を募らせているのかもしれない。女の死を利用す

る老婆の姿に、未来において同様に死体になってしまうかもしれない自分の死への冒瀆を想像していた可能性もあるだろう。

4　下人の「勇気」とはどのようなものか、本文に沿って整理してみよう。

【答】

① 門の下の場面の「勇気」
「盗人になる」ことを積極的に肯定する勇気＝〈進んで悪を選び取る勇気〉
ただし、この場面ではこの勇気が欠けている状態である。

② 楼内を見る場面
「老婆の行為」を許すまいとする勇気＝〈悪を憎み懲らそうとする勇気〉

③ 引剝ぎの場面
「盗人になること」を決断し実行する勇気＝〈進んで悪を行おうとする勇気〉

▼ポイント▲　③について「ある勇気」（一九二・7）として要約的な説明があり、「さっき門の下で、この男には欠けていた勇気」（一九二・8）、「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気」（一九二・9）と言いかえられている。①は、本文に『盗人になるよりほかにしかたがない。』ということを、積極的に肯定するだけの、勇気」（一八五・8）とあり、上記では、「さっき門の下で、この男には欠けていた勇気」と指定されている。②は「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気」の部分を指す。「全然、反対な方向に」というのは、〈善に向かうものと悪に向かうもの〉の謂である。上記の要約的な説明から、①と③は同じものとされるが、作中の下人の心の変化に即してみると、①は選択の論理的帰結に対する肯定の勇気で、続いて実行への踏み込みは予想されるとしても、明確な意識化はされていない段階である。③は明確に実行への意志を持つ。また読みの問題として、①が「盗人になる」ことへのためらい（勇気の欠如）は意味しても、それが直ちに「盗人になる」ことが「悪」だから躊躇がある（すなわち「悪」を選ぶ勇気が欠如している）と同定できるか疑いが残る。

5　小説内に登場する「作者」について、
(1)　「作者」とはどのような人物か、考えてみよう。
(2)　こうした「作者」が登場することで、小説全体にどのような効果が生まれるのか、「旧記の記者」（一八八・9）と比較しながら考えてみよう。

【答】

(1)　例えば書斎や書庫で「旧記」を参照したり、「Sentimantalisme」というフランス語を知っていたりと、大正時代の知的教養を身に付けている人物と捉えられるし、知識を衒学的に鏤めながら語る気取った一面や、古典の世界を現代の視点から捉え直し、新たな小説を構築しようとする野心を持った「作者」であることを想像することもできる。

(2)　現代（作品発表時）とは異なる時代を舞台にした虚構世界を

構築しつつあると明示することで、同時代の読者の立場や価値観に寄り添いつつ、しかも新聞「記者」のように事実中心に記すのではなく、小説内の出来事や登場人物への「作者」の価値判断や距離感も作品内容として呈示していることを仄めかす。

▼ポイント▲

(1)　初出時は「Sentimantalism」（英語）だったが、初刊からは「Sentimantalisme」（フランス語）へと変更されることを紹介し、近代日本におけるイギリスとフランスのイメージの違いについて調べてもらうのもよいかもしれない。和漢洋の才を「作者」が縦横無尽に駆使している振る舞いもまた、小説前半の重要な一要素と考えられよう。

(2)　「旧記」という言葉は本作で二度使用されているが、あくまで過去の出来事の記録を自由自在に活用する現在の「作者」が書きつつある世界であることが、最後まで読者には意識される構造になっている。読者が読んでいる内容は、「記者」による記述の単なる引用やまとめ直しではなく、「作者」によって総合化された作品であり、近代以降に成立した小説という文芸ジャンルであることを示しているとも言えよう。

言葉と表現の解答例

1　次の「分」の意味・用法を辞書で調べてみよう。

(1)　何分かの後（一八六・7）

(2)　六分の恐怖と四分の好奇心（一八八・8）

(3)　一分ごとに強さを増してきた（一八八・16）

【答】

(1)　一日二十四時間の現在の時刻表示の単位の一つで、一時間の六十分の一の長さ。ここは数分間の比較的短い時間の経過を示す用法。

(2)　全体を十に分かって割合を示す単位、十分の一の意。ここは、大ざっぱな配分比率を示す用法。

(3)　(1)に同じ意。ここは、比較的短期間の変化を一定の単位時間で刻む用法。

▼ポイント▲　「分（ふん）」は、時間、長さ、角度、尺貫法の重さなどの単位などになる。また「分（ぶ）」は、割合、利率、温度、貨幣、尺貫法の長さなどの単位となる。(1)古来の辰刻法では分は現在の三分に当たるが、それでは長すぎる。(2)は「盗人にも三分の利」「五分五分の形勢」「六分の俠気、四分の熱」などの例があげられる。比率といっても、「割分厘」の「分」（1％）ではない。(3)を、(2)の意味で段階的増加、十分の一刻みのステップアップと解する者がいるかもしれない。その意味なら「一分ずつ」とあるはずである。なお、(1)と(3)は関連するが、一方で「申の刻下がり」（一八四・8）という伝統的な時刻表示を用いているのに対し、時間経過は近代の単位呼称によっている。歴史小説の形を借りた近代小説という創作意識の所産であろう。

2　「ほかならない」（一八四・5）「暇はない」（一八四・16）「語弊がある」（一八八・15）を用いて例文を作ってみよう。

【答】

例１：すばらしい結果を残せたのは彼の努力にほかならない。
例２：試験当日の朝だというのに、ラジオ体操を第二までしているような暇はない。
例３：語弊がある言い方だが、本音を言うくらいなら、嘘をつくほうがいい。

▼ポイント▲

「ほかならない」は、断定や強調をしたい場合に、文中で効果的に用いよう。「暇はない」は、ニュアンスとしては日常会話では用いにくいので、余裕がないという文脈でユーモアのある表現に添えてみると効果が出る。「語弊がある」は、伝える言葉の選択がよくないために起こってしまう状況を想像すると思い付きやすい。あえて不適切な言い回しを用いる場合にニュアンスが伝わる。

３　本文中から動物を用いた比喩表現を抜き出し、その効果について考えてみよう。

【答】

①　犬のように捨てられてしまう（一八五・２～３）
　「捨て犬」への連想で、人間以下の扱いで無造作に捨てられる様子を言う効果。「捨て犬」の惨めさは主人から捨てられた今の下人と重なる効果もある。
②　猫のように身を縮めて（一八六・８）
　危険に対して身構える動物的な本能を感じさせる効果。
③　やもりのように足音を盗んで（一八七・６）
　気配を消して闇をはう様子を表す効果。
④　猿のような老婆（一八八・５）
　人間のレベル以下の異形のものとしての印象を与える効果。
⑤　猿の親が猿の子のしらみを取るように（一八八・11）
　老婆の行為が動物の本能的なしぐさとして印象づけられる効果。
⑥　鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕（一九〇・３）
　いかにも痩せこけて細く、肌の荒れている様子を思わせる効果。
⑦　肉食鳥のような、鋭い目（一九一・１）
　油断のならない貪欲さと不気味さ、また強い警戒心を表す効果。
⑧　鴉の鳴くような声（一九一・３）
　不気味さとずるがしこさのこもる耳障りのする響きを感じさせる効果。
⑨　蟇のつぶやくような声（一九一・９）
　陰にこもり、濁った低い声の響きを感じさせる効果。

▼ポイント▲　個々の効果とともに総合的、複合的な効果にも注意したい。①は単独で下人の惨めさを表し、②と③は不審な物事に対する下人の本能的な警戒心を特徴づける。④～⑨は、全て老婆の醸し出す人間の埒外に堕ちた者の雰囲気を伝える。陰にこもる薄気味の悪さ、狡猾さの印象である。同時に指摘しなければならないのは、これらは老婆の行為の理由がはっきりする前の比喩（直喩）であり、荒廃の世にかつがつ生を営む無力な老婆の姿が明らかになった時点で、動物の比喩は、小動物の生に類する弱々しく哀れな老婆の生の姿に対する比喩へと働きを転じて、そのみすぼらしさやいじましさ、また生に執着するしたたかさや小ずる

さを印象づけるものとなることである。

4　本文中から「ばかり」を用いた箇所を全て抜き出し、その効果について考えてみよう。

【答】

・選んでいれば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にをするばかりである。（一八四・16～一八五・2）
・そうして、この門の上へ持ってきて、犬のように捨てられてしまうばかりである。（一八五・2～3）
・上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。（一八六・3～4）
・下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高をくくっていた。（一八七・1～2）
・ちょうど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。（一九〇・3）
・後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就したときの、安らかな得意と満足とがあるばかりである。（一九〇・10～11）
・じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。（一九一・10～11）
・現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。（一九一・12～13）
・下人は、飢え死にをするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。（一九二・10～11）
・はしごの口までは、僅かに五歩を数えるばかりである。（一九三・4）
・外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。（一九三・10～11）

本作では下人の思考の「局所」に伴って最初に用いられる。その後、何度も用いられることで、極限状況だと思い込んでいる「下人」の緊張感や、ほかに行動の選択肢に思い至れない中での物語展開の緊迫感を生み出す効果が考えられる。いわば「局所」に過ぎないはずの一つの行動と共に小説の外部へと飛び出していく、下人の心の動きの速度と呼応しているとも捉えられる。最後の「ばかり」は老婆から見た夜の光景に用いられるが、光がない世界へと走り去った後、老婆と同様に読者も、そして「作者」も、下人の行方を追うことができないような限定された場へと取り残されているような余韻を残すことになる。

▼ポイント▲　「ばかり」は「はかる」の連用形が転成した名詞「はかり」に由来する副助詞であり、物事を限定する意を表す。下人の視野や世界観の狭さや、老婆との限定的な状況の雰囲気を、この「ばかり」の反復がリズムと共に醸し出している。

言語活動の解答例

1　末尾の一文から想像される下人のその後の姿を、文章にまとめてみよう。

▼ポイント▲　発展学習の課題である。下人の人物像を描くための、下人の行動の意味づけという点でこれまでの作業と地続きになる。下人の行方は、読者の想像における「人間の行方」であり、さらに言えば「主題の行方」ということになる。下人の駆け下りた「夜の底」、残された「黒洞々たる夜」の闇がどんな象徴的な意味で読まれたかによって、さらには、作品全体からどんなイメージを得たかによって、中断された未来は多様な展開を示すであろう。

2　本文と『今昔物語集』巻二十九第十八「羅城門（らせいもん）の上層（うはこし）に登りて死人を見る盗人の語（こと）」（一九五ページ）を比較しながら、「下人」の行動について、肯定・否定の立場に分かれて議論してみよう。

▼ポイント▲　小説の舞台設定自体、主典拠の「今昔物語集」の話とは、主人公の現状、羅生門のありよう、時間の設定に大きな相違がある。失職し、餓死か盗人かと迷う若い男は、主典拠では、はっきり盗みをするために上京した男である。雨の夜の羅生門のおどろおどろした雰囲気の演出もない。嫗の行為を目撃しての男の心理は、「これはもし鬼にやあらむ。」「もし死人にてもぞある。」恐る不敵さを示すものである。老婆の話は事情を言うだけで、悪へのこだわりはない。男もためらいなく奪えるものは奪って去る。原拠は現実を見据えた簡潔で鋭い切れ味の描写に終始し、野性味ある自然児のふるまいはまさに民衆世界の説話にふさわしい。小説「羅生門」の近代的な人間心理の劇との対比がはっきりする。その上で、小説「羅生門」の下人に注目していきたい。「盗人」になるかどうかの逡巡、面皰、空回りする正義感の変化、主人から暇を出された直後という心理状態、老婆からは金目のものとは言えない服のみを奪うことは重要である。また、本当に盗人になる以外に選択肢がなかったのかどうかについても考え、その上で、老婆への行為について議論していく。議論では勝ち負けにこだわらず、肯定側と否定側の両方に回って想像力を養っておくことが、単元の言語活動につながるはずである。

（大塚隆夫・荒木美智雄、補筆：小澤純）